

ファッション・マラガシイ

—— マダガスカル・ファッションと近代的身体の形成 ——

杉 本 星 子

はじめに

マダガスカルはアフリカ大陸の東に位置し、パオバブや原猿に代表される独特の生態環境で知られる島である。マダガスカルと近代ファッションという取り合わせは、意外に思われるかもしれない。しかし、近年、マダガスカルでもミス・コンテストが人気をよび、若手デザイナーがおくりだす最新ファッションが話題になっている。そもそもマダガスカルをふくめたアフリカ地域の人々のお洒落好きは、今に始まったことではない。しかしアフリカの人びとの着る土着の衣服は、西洋世界の衣服と対比され、民族衣装というカテゴリーに分類されている。

「民族衣装」という言葉は、その衣服が纏っている時間やそれを着る人びとの個性を隠蔽してしまう。現実のアフリカに、「民族衣装」というカテゴリーにうまく当てはまらないような西洋風の衣服が見いだされたとしても、それらは西洋化あるいは近代化の結果として派生した非アフリカ的なもの、あるいは模倣によって歪められた疑似西洋的なものとして排除され、無視されてきた。一方、「民族衣装」のうちに見いだされる変化は、西洋化による伝統文化の衰退、化学染料の導入による染織技術の喪失と語られる。アフリカの衣服が賞賛されるのは、多くの場合、自然素材のすばらしさ、自然を利用した巧みな「伝統」の技、大らかで素朴なデザイン、すなわち「野

生」の美による。その賞賛の陰で、アフリカの衣服は秘かに普遍的なコスチュームとしての西洋の衣服と対比され、大都市に展開するファッションという「文明」の美や洗練あるいは虚栄や醜悪と対置させられてきたのである。しかしアフリカが西洋とおなじ近代という時間を生きてきたのであれば、そこに見いだされる衣服の変化もまたファッションとして捉える視点が求められよう。

本稿では、近代マダガスカルにおけるファッションの変化とその政治・経済的背景、そしてファッションが「成形する (fashioning)」近代的身体の問題について考察したい。

1. ファッション研究と民族・民俗衣装

西欧近代のまなざしのもと、「普遍的な衣服」としての西洋服とその「時とともに変化するスタイル」としてのモード・ファッション、それとは対照的な「ローカルな衣服」すなわち「時のとまったスタイル」としての民族・民俗衣装という区別が生まれた。衣服をめぐる研究が、ごく最近まで西洋服飾美術史研究と流行現象としてのモード・ファッション研究、そして伝統的な民族・民俗衣装研究という三つの分野で進められてきたのはこうした理由による。¹⁾

モード・ファッション研究は、大きく四つの時期からなる。第一期は19世紀末から20世紀初頭から始まる。この時代、ウェブレンやジンメル、フリーゲルらが、社会

学や社会心理学の視点からファッションを論じた (Veblen 1899; Simmel 1950, 1971a, b, c; Flugel 1930)。ウェブレンは、流行が上の階層へ上昇しようとする志向と下の階層を排除する意思によって、水が上から下へ滴るように社会階層の上から下へ波及していくという「滴り理論」で知られる。そこにおいて流行の婦人用ドレスは、ブルジョワ階級の地位を誇示するために消費されるだけではなく、女性を男性に隷属させるものであると捉えられた。ジンメルもまた、ファッションは他者との差異化願望と他者との結びつきを求める画一化願望との解消できない緊張関係に基づき、生理学的快楽への欲求をみだし、他人の視線を奪いとることによって日常生活に権力関係をつくりだすものであると論じた。こうした初期のファッション研究において、流行の衣服は工業化が進んだ近代都市社会の浅薄さや退廃を象徴するものとして捉えられる傾向にあった。

ファッション研究の第二期は1950年代から60年代にかけて、構造主義や記号論のなから生まれた。バルト、リーチ、サーリンズ、レヴィ＝ストロースらが、衣服の体系を分析し、身体装飾のコードと意味、それに基づくパフォーマティブ・ストラテジーについて論じた (Barthes 1957; Leach 1958; Lévi-Strauss 1966)。80年代にペロー、リュリーらがまとめた衣装体系についての研究は、この流れを汲んでいる (Perrot 1994 (1981); Lurie 1992 (1981))。

第三期は1970年代から80年代の、ブルデューやボードリヤールらによる現代社会論や消費社会論からポスト・モダン文化論へと続く議論におけるファッション論である (Bourdieu 1984 (1979), Baudrillard 1981 (1972))。一方、この時期、歴史学では、近代における国民国家の形成やそれに伴う「伝統の創造」が注目されていた。そこにおいて、コーン、シュナイダー、ワイナーらが、ナショナル・ドレスやエスニッ

クあるいはフォークロアの文化伝統の象徴としての民族・民族衣装の社会的および政治的な意味を検討した (Weiner and Schneider 1989; Eicher 1995)。しかし、非西洋世界の「伝統的」衣服としてのエスニック・ドレスが本格的にモード・ファッション研究の視野に入ったのは1980年代以降、とくに90年代に入ってからのことである。

1990年代に入ると第三期に提起されたファッションと政治、ファッションと権力、ファッションと社会・文化資本といった問題は、カルチュラル・スタディーズにおける対抗文化としてのストリート・ファッション研究やクレイク、ホランダー、フィンケルシュタイン、ファス、バーンズ、アイチャーらのジェンダーに焦点をあてた衣服のポリティクスをめぐる議論へと発展した (Craik 1994; Hollander 1980, 1994; Finkelstein 1991, 1996; Barnes and Eicher 1992)。第四期にあたるこれら一連の研究は、フーコーの権力論を踏まえ、衣服をヒトの身体を社会的身体に「成形」する装置のひとつとして捉え直すことによって、権力と身体、身体とファッション、ファッションとアイデンティティについて考察するものであった。こうした状況の中で、これまでエスニックあるいはフォークロアという名称の下に「時間のない衣服」としてカテゴリー化されてきた非西洋世界の衣服が、あらためてファッションとして捉え直された。それとともにパリを中心としたモードの世界そのもの、そしてそこにおけるエスニックやフォークロア、トライバルと名づけられたモードと民族衣装を連続的したものとして捉えるファッション論などが、アッシュ、ブリドン、ベンストックらにより編集された (Ash and Silson 1992; Brydon and Niessen 1994; Benstock and Ferriss 1994; Eicher 1995)。90年代にベルグ (Berg) の編集で発刊された雑誌ファッション・セオリー (Fashion

Theory) は、服飾史、社会学、カルチュラル・スタディーズ、文化人類学の視点を包括した広範な議論を掲載している。

さて、こうした一連のファッション研究において、マダガスカルの布や衣服は、ほとんどといってよいほど取り上げられることはなかった。マダガスカルの布や衣服の研究で注目されるのは、フィーリー＝ハーニクとマック、吉本らの研究である。フィーリー＝ハーニクは「マダガスカルにおける布と祖先創造」という論文において、マダガスカル西部のサカラヴァの憑霊儀礼における布の役割をとりあげ、霊媒の身体を通して語ること（言葉）と着ること（衣服）が祖先の霊のアイデンティティと正統性を確定するものとなっていることを論じている（フィーリー＝ハーニク 1995（1989））。また、マックはマダガスカルの布の生産技術と服飾史について数冊の本を著している（Mack 1986, 1987, 1989）。吉本は、マダガスカルにおける織機の地域偏差、とくにマダガスカル独特の固定綜統式織機のメカニズムについて分析している（吉本1994）。また、堀内は野蚕の絹織物生産を報告している（堀内 1999）。

2. マダガスカルの伝統的スタイルと織物

マダガスカルは、早くからアフリカ東海岸とインドあるいは東南アジアを結ぶインド洋の交易ネットワークの一端に組み込まれ、インドネシアやアフリカからインド洋の季節風と海流を利用して移民が到来したと考えられている。島民の言語はオーストロネシア語族ヘスペロネシア語派に属するマダガスカル語である。地方によって人種的特徴や慣習、言語に偏差があり、大きく17の民族に分類される（地図）。

マダガスカルへの最初の移民の到来は6世紀頃といわれている。マダガスカル北部では、9世紀から10世紀に遡るとされる最古の村落遺構が発見されている。アフリカ

東海岸に都市国家が繁栄した時代、マダガスカルにアラブ商人が入植して輸出用の食料生産をおこなっていたようである。13世紀には北西部および南東部の海岸部にアラブ人の居住区が設立され、マダガスカル最初のモスクが建立されたと伝えられる。しかし16世紀にポルトガル人航海士がマダガスカルを「発見」するまでの歴史は、まだまだあまり明らかになってはいない。したがって、それ以前のマダガスカルの服飾についての詳しい歴史的資料もほとんどない。

マダガスカルの伝統的な衣服は、ランバ（lamba）とよばれる一枚布を非縫製のまま身体に巻つける衣型を基本とする（スタイル1）。エドモンズは中央高地の装飾と衣服について論じ、ヨーロッパ人との接触以前のスタイルは、猪やワニの牙で作った装飾品、さまざまなスタイルに編んだ髪、土着の織物を巻いた衣服であったと述べている。土着の絹の衣服には、花柄の染色布（valo-haraka）、黒地にビーズの縁飾りのついた褌（salaka）、デザインを織り込んだ布（akotofahana）、黒に緑の縞の布（akanjo tsy antsaha）、赤いシルクの帯や緑と赤いシルクが織り込まれた茶色いバナナの繊維布（lamba-sarika）、多色の縁が付いた白い綿布（lamba kolosy）、縁に絹の多色の縞が織り込まれた綿布（dimy soratra）などがあった（Edmonds 1896：471-473）。西海岸一帯に居住するサカラヴァの男性の伝統的な衣服は、ランバの腰巻（lambahoany, kitamby）であった。女性は胸から膝下にかけて覆う胴巻（salovana, sikina）とショール＝肩覆い（kisaly, salampy, lamba）そしてスカーフ＝頭覆い（foloara, kemba）を組み合わせていた。縫製した衣服（ak(n)anjo, kazaka）³⁾は「マラガシイの衣服」とは区別され、イスラムあるいは西洋の服と捉えられている（フィーリー・ハーニク1995：128）。

マダガスカルの衣服素材には気候や土壌

による偏差がある。中央高地では絹や木綿、海岸部ではラフィアや樹皮繊維布が多く用いられてきた。絹 (landy) は アンドゥリアマニタ (Andriamanitra) ともいわれる。アンドゥリアマニタは神をさす言葉でもある。メリナとベチレオのあいだでは、野蚕ランディベ (landibe=大きな蚕) の糸で織られるランバメナ (lambamena=赤いランバ) が、死体を包む屍衣として用いられる。一方、19世紀に中国から導入された輸入種の蚕ランディケリイ (landikely=小さな蚕) の絹布はショールや衣服など生者の衣服に用いられる。木綿は南部地方を中心に栽培され、ショールや褌、ベチレオの屍衣の素材となる。メリナは高機によって木綿の広幅のシーツを織っている。東部、西部の海岸部でもっとも多く用いられてきた衣服素材はラフィアヤシ (rofia) である。ラフィアの織物は、貫頭衣、筒状腰布、ベツトカバー、交易品などさまざまな用途に用いられる⁴⁾。サカラヴァは広幅のラフィア布を、ショールや蚊帳にしている。サカラヴァにはライマサカ (laimasaka) とよばれる緋織りの技術があった。ライマサカは屍衣、部屋の間仕切りなどに用いられたが、1970年代にはほとんど姿を消した⁵⁾。マダガスカル南東部を中心に、樹皮繊維 (lamba hafotra) で織られた衣服や褌がみられる。羊毛の織物生産はフランス植民地時代に、南東部のマハファーリに導入された。おもに堅機で絨毯が織られている。その他、マダガスカルにはサイザル麻やバナナ繊維の織物もある。

土着の織り機には、地方によるバリエーションがあるが、多くは固定綜統と輪状整経を特徴とする。織り技法は全島的に統一性が高く、基本的に地組織はいずれも平織りもしくはその変化型である。デザインは主に経縞である。さらに北部には経糸紋織り、南部には緯糸紋織りがみられる。経糸紋織の昼夜織技法は、メリナ、ベチレオ、ベチミサラカ、サカラヴァに、浮織技法は

メリナの織物にみられる。緯糸浮織技法の緯糸紋織は、メリナ、ベチレオ、アンタンドゥルイ、マハファーリのあいだにみられる。とくにビーズを織り込んだ南部のアンタンドゥルイやベチレオの織物が有名である (吉本 1994; Mack 1986, 1989)。

3. マダガスカルの近代化とラダマー世の服飾改革

インド洋へのヨーロッパ諸国の進出と奴隷交易の拡大は、マダガスカルの政治状況を大きく動かした。17世紀の中頃、マダガスカル南西部にサカラヴァ王国が形成された。王国は分裂しながら西海岸に沿って北上し勢力を拡大していった。18世紀初頭、マダガスカル東部の海岸地域はヨーロッパの海賊たちの根拠地となった。そうした海賊の血統をひくと伝えられるラツィミラフ (Ratsimilaho) のもとにベツチミサラカ同盟が形成された。18世紀後半から19世紀初頭にかけて、ベツチミサラカとサカラヴァがザンジバルと同盟を組んで、コモロや東アフリカ沿岸各地を襲撃した。一方、中央高地に台頭したイメリナ王国が18世紀末に急速に勢力を拡大し、全島統一に向かった。

18世紀末から19世紀初頭に生きた初代イメリナ王アンドゥリアナムプイニメリナ (Andrianampoinimerina) の肖像画は、シンプルな腰巻きに大きなランバに槍というスタイルで描かれている (スタイル2)。交易でもたらされたヨーロッパの銀貨や金は、そのまま、あるいは鋳なおされて身体装飾品、腕輪などに用いられた。色とりどりのビーズも好まれた輸入品である。1822年に描かれたイメリナ王国の将軍ラファラヒィ (Rafaralahy) の肖像画には、鮮やかな模様織りの伝統的な豪華な布をまとい、ビーズや動物の歯牙またはそれを象った金属片で装飾された帽子をかぶり、宝石をはめ込み金の歯牙型飾りを付けたベルト

を巻き、牛の皮を張った盾と槍が描かれている（スタイル3）。現在も、南部バラの戦士たちは、同様のビーズや小安貝、動物の歯牙で飾った帽子と牛の皮を張った盾と槍をもった儀礼衣装で踊る。

マダガスカルの人々の衣服が、土着の織物を持ちいた非裁断の巻き衣型スタイルから西洋式の縫製衣服へ移行したのは、1810年から1828年にかけてイメリナ王国を統治したラダマー世の時代である。ラダマー世はイギリス人ハステイ（Hastie）を顧問にむかえ、イギリスのロンドン・ミッション（London Missionary Society）の援助を得て国家建設を進めるとともに、フランスと結んでいた西海岸のサカラヴァ王国と戦って全島統一を目指した。ラダマー世は軍隊に西洋式の訓練をするとともに、軍服に西洋服を取り入れた（スタイル4）。マダガスカル近代は、このラダマー世による軍服と軍事教練の導入による近代的身体の錬成からはじまったといえよう。このとき導入された西洋風の軍服が、今日メリナの人びとがファマディハナ（二次葬）に招く楽隊の衣装、すなわちズボンに赤い色の上着、腰に布を巻き頭にカンカン帽をかぶるというスタイルのルーツといわれる（スタイル5）。

ラダマー世は、英国製の緋色布のランバを身につけ、当時最先端の西洋ファッションを採用した。ラダマー世が、尊敬するナポレオンの姿を模した軍服姿でポーズをとった肖像画が残されている（スタイル6）。王が長い髪を独特の髪型に編む祖先伝来の慣習を放棄することによって国家に災厄がもたらされることを恐れた女性たちは、ラダマー世の断髪に反対する大規模な集会を開いた。しかし、王の断髪は人々の反対を抑えて敢行された。これは、日本において明治天皇が自ら断髪し洋装することによって、明治という新たな時代の到来を身をもって示す50年ほど前のことである。

ラダマー世の後を継いだラナヴァルナー

世（Ranavalona I）は、フランス人ラボルドゥ（Jean-Baptiste Laborde）を顧問にむかえ、スコットランド人キャメロン（James Cameron）に命じて石造りの王宮を建設させた。ラナヴァルナー世はヨーロッパ製の布地のドレスの上に白いマダガスカル製ランバを巻いて謁見した。後にメリナの正装となる西洋服と白いランバのショールという組み合わせの源はここに辿ることができる。王権制度が整うとともに位階に応じて着用できるランバの色や柄が定められた。近代マダガスカルは、西欧社会ではすでに革命期に放棄されていた王権の服飾規定を採用することによって、人々を近代国家のうちに位置づけたのである。この服飾コードの確立によって、王国の階級制度は視覚化された。王侯貴族はさまざまな色の縞柄のランバを着たのに対して、安価な白や生成りのランバは平民や奴隷のものとした。先に述べたように、マダガスカルは東アフリカ沿岸を中心としたインド洋西域交易圏の一角にある。この海域には18世紀以来、アメリカの捕鯨船が進出していた。1833年にアメリカとザンジバルが条約を結び、それを契機に東アフリカ帯にアメリカ製の無漂白綿布が大量に輸出されていたのである（富永2001：188）。

ラナヴァルナー世の統治時代、1835年から36年にかけて、洗礼と宗教教育を禁止されたロンドン・ミッションはマダガスカルを退去した。この時期、宮廷では一時的にアラブ風ファッションが流行した。しかし王位を継いだラナヴァルナ二世は、1869年、大臣を務める夫とともにキリスト教に改宗した。1874年には、女王に近づく者は“ヴァザハ（vazaba、外国人、外国の）”の服を着なくてはいけないという西洋服正装令をだした。女王の離宮のあるアンブヒマンガは、アンタナナリブ（首都）のヴェルサイユとよばれた。首都では上流階級が最先端の西洋服ファッションを取り入れた。一般庶民もまた、西洋風の帽子を好み、流行

柄のランバを楽しんでいたようである。ミューランは「土地の人々は縁が縞柄のランバを好むが、これにはファッションがある。アンタナナリブではパリと同じようにファッションが変化する」と述べている (Mullens 1875 : 138-139)。実際、ヨーロッパとの接触によって、シルクやサテン、ウールの布や縫製衣服 (lamba zaitra) が中央高地にもたらされた。人々は割礼儀礼で父が子を抱くときに赤や緑のシルクやサテン地に別の色を縁に縫いつけた布を使うようになり、その布を「子どもの父の衣 (lamban-drain-jaza)」と呼んだ。赤白黒または緑などの5本縞のウール地などで縁に飾り縫いをしたキャリコ (lamban-miakotso) も人気があった。また、アラブから輸入されたターバン (hamama)、「赤い雄牛の心臓 (fan'ombimena)」とよばれる赤いウールの円錐形の帽子、マダガスカル製のマット織りの帽子を赤い輸入布で覆い長いリボン状の布をつけた帽子などが流行した (Edmonds 1896 : 473)。

一方、1882年にイギリス人宣教師ウィリスの妻 (Mrs Selina Willis) が、アンブヒマンガ (Ambohimanga) で貧しい女性たちの生活を助けるためにレース刺繍技術を教えた。教会に集まる女性たちによって、白生地に白糸でレース刺繍やカットワーク刺繍をほどこしたランバやテーブルクロスが作られるようになった。この刺繍は、後にマダガスカルの伝統工芸品の一つに数え上げられるようになった。

ラナヴァルナ三世の統治時代は、日本の鹿鳴館時代に重なる。そのころ日本では昭憲皇后が洋装することによって日本女性の西欧化・近代化の美しいモデルとなるとともに、儒教道德の化身として表象され女性の国民化に利用されていた (若桑 2001 : 13)。フランス製のローヤル・ファッションと王冠という姿で謁見したラナヴァルナ三世もまた、自らの身体をもって西欧化・近代化を表象し、熱心なキリスト教徒とし

て振舞うことによって、旧イメリナ王国の版図を越えたマダガスカル全島の女王として君臨し、人びとを国民化するためのモデルとなったといえよう (スタイル7)。

4. フランス植民地統治下における輸入布の流入

1895年のフランスによるマダガスカル保護領化以降、都市のエリート層のあいだのみならず、軍隊や警察、ミッション・スクールのユニフォームを介して服飾の西洋化はいつそう進行した。西洋服の古着は、カトリック教会や市場を通して売られた。メリナ王国の解体後、宮廷人の需要に支えられてきた複雑な織物技術は衰退し、それに代わって外国製の白や生成の綿布が大量に流入した。

1898年に、アンタナナリブにマダガスカル最初の美術学校 (L'École et Atelier d'Art Appliqué) が創設され、角細工の食器、寄せ木細工、木彫家具・置物などマダガスカルの伝統的美術の教育が行われるようになった。アンタナナリブに続いて、チュレアール (Tulear)、アンパニヒイ (Ampanihy) 他、各地に同様の美術工芸学校が設立された。なかでもアンブシチャ (Ambositra) 校はマダガスカルの美術工芸の振興に中心的役割を果たした。美術学校では衰退したメリナの伝統的な織物技術も教育にとりいれ、西欧から導入した化学染料をつかって、王宮の建築にみられる意匠をモチーフとした「伝統的な」織物を創作した。こうしてフランスの植民地統治下に、マダガスカルの「伝統文化」が洗練されていった。

1937年のマダガスカルへの布・衣料製品の輸入状況を示す資料 (Agence Économique du Gouvernement Général de Madagascar et Dépendances 1940) から、当時、人気のあった輸入布の種類と、地方による嗜好の違いをみることができる。

それによると、タナナリブを中心とする高地、タマタブを中心とする東海岸、マジュンガを中心とする西海岸の三地域を通じてもっとも需要が多かったのはフランス製の白綿布と生成綿布である。カーキ色の平織り綿布と色柄プリント綿布（キャリコ）が、新しい流行でそれに次ぐ人気であった。

また、タナナリブを中心とする高地の西洋服を着用する人びとのあいだでは、綾織り綿布やズック布の需要が多い。注目されるのは花柄、縞柄、格子柄変わり織綿布、シュミーズ、クレトン、サテン、ゼフィー、ナンソークなどのさまざまな色柄プリント、捺染布の人気である。また、テニス綿布、フランネル綿布の赤、ピンク、青、縞も需要が多い。ルーアン製のベルベット綿布は中流階級に好まれた。とくに人気は格子縞、赤、薄紫、青で、多色柄、花柄、古典柄も好まれていたようである。さまざまな絹製品も輸入された。高価なりヨン製のシルクは、タナナリブで大きな需要があった。ほかにタッサー・シルク、クレープ・デ・シン、シルク・ベール、人絹も輸入されている。

タマタブを中心とする東海岸では中央高地ほど多種類の布は輸入されていない。フランス製の厚手の生成綿布と白綿布、イギリス製やフランス製のカーキ色平織り綿布と綾織綿布、そしてフランス製の色柄プリント綿布ぐらいである。一方、マジュンガを中心とする西海岸ではとくに鮮やかな色とけばけばしいデザインのプリント布が好まれ、腰巻きとして使われていると記されている。また輸入品のリストには、キコイ（Kikoy）、サリブラ（Saryboursa）、ジホ（Jiho）、カンガ（Kanga）、サムポ（Sampo）といったアフリカ東海岸に多くみられる衣服名が散見される。また、この時代の重要な輸入品として帽子があげられる。とくにフランス製のフェルト帽とキャスケットの需要が多いが、マジュンガ地方ではムスリムの帽子タリブも輸入されて

いる。

このような地方による輸入布製品のちがいは、マダガスカル各地の服飾の地方的偏差を明確にしていったと考えられる。中央高地では、フランスのモードを取り入れた西洋服が流行した。女性のファッションはクリノリン・スタイルから短めのスカート、そしてスーツへと変化した。上流階層の人びとは、こうした西洋服のうえに白い絹や綿の布に白の織り模様あるいは刺繍を施したランバを纏うことで、自無地のランバを用いる一般の人びととの違いを示そうとした（スタイル8）。このように中央高地の人びとが西洋服に白いランバ、ベルベットのリボンを巻いたストロー・ハットという都会的なおしゃれを正装とするようになったことは、インド更紗やフランス製のプリント地の腰巻きに藺草で編んだ縁なし帽を用いる東海岸の人びととの差異を強調する結果になった。一方、西海岸地方の人々は、鮮やかな色彩で花模様などが描かれた輸入プリント綿布の腰巻きとショール（肩布）、あるいはそれにスカーフ（髪覆い）というように二枚または三枚のプリント布を組み合わせ、高貴な女性たちは下に西洋風のブラウスをきた（スタイル9）。古くからムスリム文化の影響が強い北西部や南東部では、裕福な男性の服飾としてザンジバルのスワヒリ商人や中近東のムスリム風のジョホとよばれる長い上着にターバン、あるいは布製縁なし帽というスタイルが浸透した（スタイル10）。

こうしてフランス植民地統治期における本国と植民地という政治的な力関係の下で、マダガスカルは西欧諸国の機械織り布の輸出市場として資本主義経済の周縁に位置づけられるとともに、パリを中心としたモードの世界の周縁にも位置づけられた。輸入布はマダガスカルの人びとの日常着として浸透したが、それと平行して、メリナの高度な織物技術や、インドネシアとの共通性を指摘されるサカラヴァの絛織り技術は急

速に失われていった⁶⁾。一方、死者を包んで埋葬するための屍衣には依然として高価な土着の山繭の絹織物が使われ続けた。昔の屍衣は実際に真紅であったといわれるが、現在の屍衣は必ずしも色が赤いわけではない。この場合、メナは豪華といった意味で使われている。かつてランバメナは王の特権的な衣服でもあった。しかし王権の廃止と輸入布の流入によって、ランバメナと普通のランバという対比は、死者と生者の対比として受け取られるようになった。その結果、山繭製絹織物には屍衣イメージが付着した。

もともとマダガスカルにおいて、生者の世界と死者の世界は必ずしも分離されていない。とくに西海岸一帯では憑霊儀礼がさかんで、死者は霊媒を介して聖者とコミュニケーションをとる。昔の王霊が憑いた霊媒は、王が生前好んだスタイルの衣服を身に纏って人びとと対話する。それぞれの王の衣服はアイデンティティと切り離せない。王の祖先の儀礼をおこなうとき、縫製した服を着ることはタブーである。西洋的な上着、下着、ズボン、ベルト、靴、縁のある帽子はすべて禁じられ、男女とも縫い目の無いランバを体に巻きつけるのみである（フィーリー・ハーニク 1995：132）。植民地時代の輸入布や西洋服の一般化により、マダガスカルにおける生者の世界と死者の世界は、身に纏う衣服の違いによって区別されるようになり、身体的連続性は分断されることになったのである。

また、大量の輸入布とその普及は、布を扱うインド商人のマダガスカル各地の都市への移住と経済力の拡大をもたらした。インド系移民は同郷で同カーストの成員との結婚を規範とし、インド本国の生活習慣を保持することによってマダガスカルの人びとと一線を画している。フランス植民地期におけるマダガスカル在住のヨーロッパ人とインド人の増加は、マダガスカルの人びとにヴァザハ（外国人）とマラガシイ（マ

ダガスカル人）という対立意識を醸成させた。それとともに、マダガスカルファッション産業（布の生産・輸入、縫製、流通、販売）は、おもにそのフランス人とインド人というヴァザハに掌握されるという経済構造が形成された。

そうした状況の中で、中央高地のメリナの人々がイメージするマラガシイの服飾として、スーツのような西洋服に縞柄や刺繍のついたランバを肩からはおり、カンカン帽をかぶるスタイルが定着していった。一方、植民地政府が現地警官向けに採用したユニフォームは半ズボンである。成人男性の半ズボンは、アフリカ探検用のサファリ・ルックのように非西欧社会の非日常的状況で例外的にしか着用されない。むしろ20世紀の西洋社会において、半ズボンは成人の服と区別される子供服の一つのスタイルとして定着した衣服である⁷⁾。西洋服を基盤としながらも、その過剰あるいは欠如によって特徴づけられるマダガスカル・スタイルの衣服は、植民地的アイデンティティや植民地的身体形成と不可分に結びついているといえよう。それはまた、フランス文学に現れるロマンチックな南国の楽園か、野蛮人が住む殺伐とした流刑地として表されるマダガスカル表徴とパラレルである。

5. 独立後のマダガスカルとマダガスカル・ファッション

1960年、マダガスカルはフランスから独立したが、西欧とりわけフランス指向のファッションは植民地時代と大きくは変わらなかった。ただし社会主義政権下でコトナ（COTONA）やソテマ（SOTEMA）などのテキスタイル工場が国有化され、国内産の機械織り布が普及した。

中央高地の女性たちのあいだには、ワンピースやスーツと帽子というスタイルが普及した。一方、西海岸一帯の女性たちのあいだには、ブラウスとスカートあるいはワ

ンピースのほかに、東アフリカ沿岸のスワヒリ系の人々のあいだで広く用いられている格言入りプリント綿布カンガ（腰巻き）を縫製したブラウスと組み合わせるスタイルも広く見られるようになった。諺や格言のプリントつきカンガの流行は、ザンジバルに始まるといわれる（富永 2001：160-163）。マダガスカルではキリスト教の浸透にともなって、アルファベット表記されたマダガスカル語で聖句を織り込んだ織物が織られていたが、カンガにもさまざまな諺がプリントされるようになった。初期はインド製であったが、やがてコトナやソテマの国産プリント・カンガがとってかわった。

マダガスカルのファッション界に顕著な変化がみられるのは、1980年代末以降である。1986年以来、政情が不安定であった88年から92年を除いて毎年、マダガスカルのテキスタイル関連業者が集まってファッション・ショー「マンザ」を開催している。1990年代に入ると、フランス資本のエプシロン（Epsilon）のユニフォーム生産工場やインディゴ（indigo）のジーンズ工場などを始めとする欧米資本の大規模なテキスタイル工場がマダガスカルに再進出した。アメリカ資本の世界的企業であるポロ（Polo）がソテマの一部を買収してマジュンガに縫製工場（Polo Garment Majaunga）をつくった。ノバニット（Novaknits Madagascar）ではカシミアのニット製品が生産されるようになり、インド洋地域のモダン・テキスタイル産業の中心であるフォルマコ（FORMACO）もマダガスカルに進出した。マダガスカルの安価な労働力を利用した輸出用衣料の生産は、マダガスカルの人びとのあいだにも世界的なモードの消費を促す結果になった。モデル・クラブもでき、ビューティー産業も急速に発展した。マダガスカルの人々の多くがクリスチャンであることから、純白のレース地のロング・ドレスにベールというウ

エディング・ドレスをはじめとするさまざまな新作ドレスを発表するブライダル産業も成長した。若者たちは、ジーンズとTシャツ、ミニ・スカートにキャミソールという世界共通の若者ファッションを身につけるようになり、ランバや帽子、腰巻やショール、スカーフなどは田舎臭くダサイと見なされるようになった。

ミス・アンタナナリヴ（Miss Oliravina Tana）をはじめとするミス・コンテストが首都をはじめ各地でおこなわれるようになった。アンタナナリヴのミス・コンテストでは、水着、イブニング・ドレス、民族衣装という三種類の服を着て審査が行われる。このとき民族衣装として着用されるのは、スーツにランバ、ドレスにカンカン帽というスタイルである（スタイル11）。これは民族音楽家たちの舞台衣装と共通している。彼らの衣装を特徴づけるのは、フランス植民地統治時代に中央高地のメリナが好んだランバ、帽子、日傘とブロック（長い丈の男性用上着）である。このノスタルジックなスタイルが、アンタナナリヴにおける公的なマダガスカル・スタイルの一つとなっている。マダガスカルの主要産業の一つであるツーリズムにおける広告写真もまた、豊かな自然とならんでこの古いメリナ・スタイルの衣装に「マダガスカルの伝統」という新たな価値を付与している（スタイル12）。

90年代に入ると、マダガスカル人のデザイナーやモデルが世界的なモードの舞台にも進出するようになった。デザイナーズ・ブランドも次々と生まれた⁸⁾。今日、マダガスカル人デザイナーが作り出すモードには、世界に通用するインターナショナルなモードへの志向と、マダガスカルのオリジナルなモードへの志向という二つの方向性が見いだされる。人気デザイナーのうち前者の代表がファリイ（Faly）、後者の代表がカラス（Kala'S）といえよう。カラスが2000年に発表し話題となった作品は、マ

ダガスカルやアフリカのイメージを強調したものである。カラスは、南部マダガスカルに墓標に見られる牛のデザインや幾何学模様をスカートやパンタロンに配し、ラフィアの装飾で首や腕、足首を飾るモード、ジュートやジョホ（joho、絹とラフィアの混紡）に伝統的な織物柄をほどこしたチョッキ、アフリカの泥染め布地のデザインと大きな帽子を合わせたスタイルといった、いわゆるエスニック・シックな作品によって、マダガスカル・スタイルをエレガントな最新モードに昇華することに成功した（スタイル13）。

結 び

近代マダガスカルのファッション史は、ラグマー世の服飾改革に始まった。王の断髪、洋装は、日本の明治維新におけると同様、軍隊組織の形成や教育機関の設立と平行して行われた。マダガスカルの伝統的な衣服である無縫製の一枚布からなるランバから、縫製した西洋服への移行は、そのまま国民としてのマダガスカル人、すなわちマラガシイとしての近代的身体の成形に伴うものであった。

先に述べたように、マダガスカルの工芸品や染織品、刺繍などはフランス植民地時代に技術が向上しスタイルが洗練された。複雑な模様織の技術は一時ほとんど絶えたが、近年、再び復刻された。こうした「伝統的」織物の製作にあたってつねにマダガスカルの「正統」な意匠として参照されてきたのは王宮建築の装飾である。しかし王宮の装飾には、イメリナ王国が伝えてきた意匠のみならず、ラナヴァルナー世のアドバイザーであったフランス人ラボルドゥがインド美術のさまざまなデザインからインスピレーションを得て考案した「オリエンタル」な意匠も含まれているといわれる（Mack 1989：56-58）。明治期の日本でキョッソーネらが「古い文化をもつ日本イ

メージ」（若桑 2001：381-382）の創造に貢献したと同様に、「古い文化をもつマダガスカル・イメージ」もまた、西欧オリエンタリズムの眼差しのもとで導入され、選択され、あるいは創りだされた技術や意匠などに支えられてきたのである。

西洋化が早く進んだ中央高地において、西洋服の上にランバがショールのように羽織られ続けたのは、こうした「古い文化をもつマダガスカル・イメージ」への憧憬があったためと考えられる。ランバの素材は土着の織物から輸入布に代わる一方で、ランバという形式そのものがマダガスカル的なものの象徴となったといえよう。マダガスカル語の織るという動詞（ママハナ mamahana）の語根はfahanaである。ママハナには、食事を与える、援助する、人を復活あるいは再生させるという意味もある。ランバの横糸（ファハナ fahana）には、子どもへの滋養物、贈り物、王から臣民への祝福、生命の維持、援助という意味もある（フィーリー・ハーニク 1995：135）。ランバは、西洋化とともに獲得された近代的身体にマラガシイの生命を与え続けるものだったのである。

ファッションは、軽やかな差異の戯れのなかに多重的な意味を織り込みながらスペクタクル的に展開する。あるスタイルのファッションを身につけることは、そこに織り込まれた価値や思想を身に纏う身体を成形することにはかならない。新しいマダガスカル・モードの生成は、現代における西洋世界とアフリカそしてマダガスカル、マダガスカルのなかの都市と地方といった中心と周縁の対立に伴うさまざまな権力関係のなかで、新たな身体を創造する試みなのである。今日、マダガスカル人デザイナーたちは、世界へ発信するモードの創造をとおしてマダガスカル人＝マラガシイとしてのアイデンティティを模索している。そのためにラフィアや野蚕といったマダガスカルの自然素材、南部の墓のモチーフが改め

て見直されている。しかし多くのマダガスカルの人びとにとって、今や野蚕は屍衣のイメージと、ラフィアは田舎の粗野な服のイメージと強く結びついている。そのため海外の人びとには洗練されたマダガスカル・スタイルとして受容されるモードが、マダガスカルの人びとには受け入れられ難い。それでも少しずつ山繭やジョホ、ラフィアといった自然素材を使ったドレスやショールをあつかう高級ブティックが増えつつある。しかし、マダガスカル・モードが「自然」素材を強調することは、西洋の「文明」に対してマダガスカルを「自然」さらには「未開」の側に位置づけるようなイメージ化に荷担することにもなりかねない。さらにマダガスカル南部の墓のモチーフを用いたマダガスカル・エスニックの創造は、ファッションの中心である中央高地の「都市」に対して南部地方を「ローカル」として改めて位置づけ直すことでもある。そこに新たな権力関係が作り出される。

一方、2000年の若者たちのストリート・ファッションとして注目されたのは、つい最近まで田舎者を示す衣服の代名詞のように思われてきたランバや帽子であった。ラジオやテレビの普及は、こうした都会のファッションをすばやく地方の若者たちのあいだにまで拡げる。若者ファッションは、これまで海岸地方と中央高地、民族的なアイデンティティによって分断されてきたマダガスカルの人びとのあいだに独立国家マダガスカルの国民として共有されるマラガシイ・アイデンティティを生み出していくのだろうか。マダガスカル・ファッションは、それを纏う人々の政治・社会関係のなかで生成し、またそれを新たに生成し直しながら、マラガシイという国民を成形（ファッション・マラガシイ）している。

注

- 1) 「伝統」という言葉が今日のような意味でつかわれるようになったのは、過去2世紀間のヨーロッパにおいてのことといわれる（ギデンス 2001：84）。日本のキモノ研究も同様の三つのカテゴリー分類のなかで展開したが、これについては改めて詳しく論じたい。また以下のファッション研究史概説では日本人の研究には触れなかったが、服飾美術史、社会史、社会学などにおける研究があるほか、近年では鷺田による哲学の身体論と結びつけたファッション論や関本らの文化人類学と社会経済史を結びつけたグローバルな視野にたった布研究などが注目されている。
- 2) マダガスカル民族意識はフランス植民地統治以前の王国への帰属意識と居住地の地理的な区分、慣習的な差異に基づいているが、民族の数や区分は必ずしも明確ではない（深澤 1985：208-209）。
- 3) アカンジョという言葉は、フランス語で胴着を意味するカンズ（canzou）から派生したスワヒリ語のカンジョ（kanjo）からきたといわれる（フィーリー・ハーニク 1995：166）。
- 4) マハファリーの堅機によるウール・カーベットの生産は、農業による蚕の死滅によって不可能になった絹織物に代わる新しい工芸品として導入された。ウール・カーベットのデザインは、伝統的な織物に用いられてきた意匠ではなく墓標の彫刻のモチーフをもとにしている（Mack 1989：20）。
- 5) ベチミサラカの男たちはラフィアの織物を縫い合わせてつくった貫頭衣型のスモックを着る。穀物商人たちは、この貫頭衣の首の部分の縫い合わせて穀物袋にして利用した。近年、ラフィアの穀物袋に代わってビニール製の袋が出回るようになると、土地の人々はその袋に穴をあけて貫頭衣にし田植えなどの野良着に用いるようになった。
- 6) サカラヴァの緋はデザイン、技術ともにインドネシアの絣織りとの類似性を指摘されている。織り技法についてはラクトゥアリスアラの論文に詳しく述べられている（Heurtebize, G. and J. A. Rakotoarisoa 1974）。
- 7) イギリスもまたインドにおいて、現地人警察官や下級職員の制服にカーキ色のコットン地の半ズボンを採用した。これは熱帯という気候のみを理由としているわけではない。インドのイギリス人植民地官吏の服に半ズボンは採用されていない。植民地政府による半ズボンの現地人

- 向けユニフォームの採用は、マダガスカルに限らない。
- 8) マダガスカルデザイナーズ・ブランド史は、人きく二期に分けられる。第一期にはMinayo、Mirado、Dj creation、John's、Joel A、H. Raraivo、Debraら、第二期:Eala'S、Katitu、Maitrise de soie、Cie de Madagascar、Eric Raisina、Hasina Andriamanalina、Hagamainty、Loa、Rija、Lucie Boncour、Océane Vogueらが挙げられる。
- 参考文献
- Agence Économique du Gouvernement Général de Madagascar et Dépendances
1940 Le Commerce d'Importation à Madagascar et Dépendances.
- Ash, Juliet and Elizabeth Wilson (eds)
1992 Chic Thrills: a Fashion Reader, Berkeley: University of California Press.
- Barthes, Roland
1957 Le System de la Mode, Paris, Éditions du Seuil.
- Baudrillard, Jean
1981 (1972) For a Critique of the Political Economy of the Sign, Mo., Telos Press (『記号の経済学批判』今村仁司・宇波彰・桜井哲夫訳, 法政大学出版会)
1982 (1976) Symbolic Exchange and Death, London: Sage, 1976. (『象徴交換と死』今村仁司・塚原史訳, 筑摩書房, 1993)
- Benstock, Shari and Suzanne Ferrris (eds)
1994 On Fashion, New Brunswick: Rutgers University Press.
- Bernes, Ruth and Joanne B. Eicher (eds)
1992 Dress and Gender: Making and Meaning, Washington. D.C.: Berg.
- Bourdieu, Pierre
1984 (1979) Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste, Massachusetts: Harvard University Press. (『ディスタンスション』石川洋二郎訳, 藤原書店, 1990)
- Bradt, Hilary
1988 Madagascar: Exotic Lands, Bucks: Aston Publications.
- Brunet, Geneviere
2000 Tana Cultures 2000: Guide d'une Capitale, Antananarivo: Tsipika, le Cite.
- Catat, Louis
1890 Voyage à Madagascar (1889-1890), Paris: Administration de l'Univers Illustré.
- Craik, Jenifer
1994 The Face of Fashion: Cultural Studies in Fashion. New York: Rourledge.
- Edmonds, W.J.
1896 "Bye-gone Ornamentation and Dress amongst the Hova Malagasy." Antananarivo Annual, XXII, pp.469-477.
- Eicher, B. Joanne
1995 Dress and Ethnicity, Wasbington D.C.: Berg.
- フィーリー=ハーニク,G.
1995 「マダガスカルにおける布と祖先創造」, in ワイナー, A.B. & J.シュナイダー編, 『布と人間』, pp.119-182.
- Finkelstein, Joanne
1991 The Fashioned Self Cambridge: Polity Press.
1996 After a Fashion, Victoria: Melbourne University Press.
- 深澤秀夫 1985 「アジアとアフリカの間で: マダガスカルの多様性と斉一性」, 週刊朝日百科世界の地理108 『中・南アフリカ』, 朝日新聞社, pp. 206-209.
- Fusss, Diana
1992 "Fashion and the Homospectatorial Look", Criticla Inquiry 18: 713-737.
- Gaines, Jane and Charlotte Herzog (eds)
1990 Fabrications: Costume and the Female Body. London and New York: Routledge.
- ギデンス、アンソニー
2001 『暴走する世界: グローバリゼーションは何をどう変えるのか』 佐和隆光訳, ダイアモンド社. (Runaway World, 1999, London: Profile Books.)
- Heodmann, Pierre
1937 "Les Industries de Tissage", La Revue de Madagascar. 17, pp.93-120.
- Heurtebize, G. and J. A. Rakotoarisoa
1974 "Not sur la Condition des Tissus de Type Ikat à Madagascar: Les Lai-masaka de la Région de Kandrehio et d'Ambatomainity", Archipe, 18, pp67-81.
- Hollander, Anne
1980 Seeing though Clothes, New York: Avon.
1994 Sex and Suits: The Evolution of Mod-

- ern Dress. New York : Alfred Knopf.
- 堀内 孝
1999 「祈りの野蚕布：マダガスカルへ」季刊『銀花』, 117, pp. 74-83.
- Kaiser, Susan
1990 The Social Psychology of Clothes : Symbolic Appearances in Context. Sec. ed. New York : Macmillan.
- Kunzle, David
1982 Fashion and Fetishism : A Social History of Corsets, Tightlacing and Other Forms of Body-Sculpture in the West. Totowa, N.J. : Rowman and Littlefield.
- Leach, Edmond
1958 "Magical Hair". Journal of the Royal Anthropological Institute, 88-2, pp.147-164.
- Levi-Straus, Claude
1966 The Savage Mind, London : Weidenfeld and Nicolson. (『野生の思考』大橋保夫訳, みすず書房, 1976)
- Lurie, Alison
1992 (1981) The Language of Clothes, London : Bloomsbury. (『衣服の記号論』木幡和枝訳, 文化出版局, 1987)
- Mack, John
1986 Madagascar : Island of the Ancestors, London : British Museum Publications.
1987 "Weaving, Women, and Ancestors in Madagascar", Indonesia Circle, 42, pp.76-91.
1989 Malagasy Textile, Shire Ethnography, 14, Aylesbury : Shire Publications.
- McDowell, Colin
1992 Dressed to Kill : Sex, Power, and Clothes, London : Hutchinson.
- Mullens, Joseph
1875 Twelve Months in Madagascar, New York : Robert Carter and Brothers.
- Oberlé, Philippe
1976 Tananarive et l'Imerina, Tananarive : Librairie de Madagascar
- Perrot, Philippe
1994 (1981) Fashioning the Bourgeoisie : A History of Clothing in the Nineteenth Century Princeton, New Jersey : Princeton University Press. (『衣服のアルケオロジー』大矢タカヤス訳, 文化出版局, 1985)
- Petit, G. and R. Moulan
1933 Madagascar, Paris. Arts et Métiers Graphiques.
- Ralaimihoatra, Edouard
1969 Histoire de Madagascar, Tananarive : Hachette Madagascar.
- Saron, Gilbert
1956 Madagascar et les Comores, Paris : Paul Hartmann Éditeur.
- Sahlins, Marshall
1976 Culture and Practical Reason, Chicago : University of Chicago Press. (『人類学と文化記号論』山内訳, 法政大学出版局, 1987)
- Simmel, George
1950 "Adornment" in the Sociology of George Simmel, New York : Free Press. pp.338-344.
1971 a On Individuality and Social Form, Chicago : University of Chicago Press.
1971 b (1904) "Fashion" in Simmel On Individuality and Social Forms, pp.294-323.
1971 c (1903) "The Metropolis and Mental Life", in Simmel On Individuality and Social Form, pp.324-39.
- 富永智津子
2001 『ザンジバルの笛：東アフリカ・スワヒリ世界の歴史と文化』, 未来社.
- Vernier, E.
1964 "Étude sur la Fabrication des Lambamena", Journal de la Société des Africanistes, 34-1, pp.9-34.
- Veblen, Thorstein
1899 A Theory of the Leisure Class, New York : American Classics. (『有閑階級の理論』小原敬士訳, 岩波文庫, 1961)
- 若桑みどり
2001 『皇后の肖像』, 筑摩書房.
- ワイナー、アネット・B&ジェーン・シュナイダー
1995 『布と人間』, 佐野敏行訳, ドメス出版. (Cloth and Human Experience, Wenner Gren Foundation for Anthropological Research 1989)
- 吉本忍
1994 「マダガスカル機織り文化複合」季刊民族学63, pp.63-74.
- 展覧会カタログ
『人英博物館所蔵品によるアフリカの染織』京都国立近代美術館, 1991. 1022-12. 08.

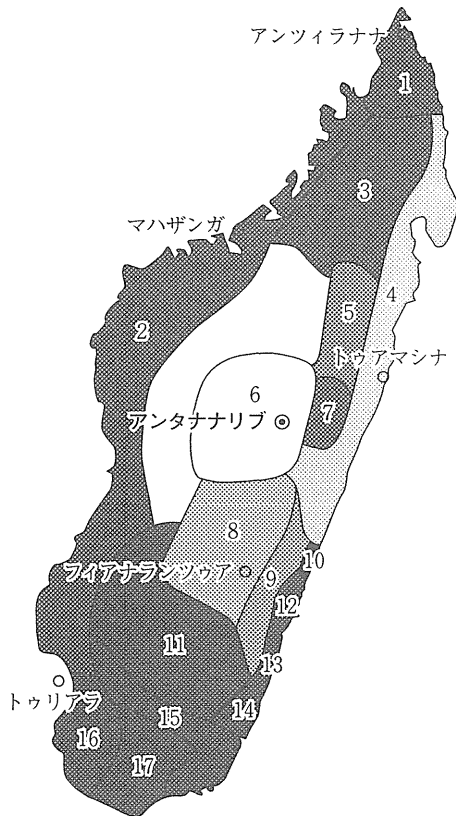
雑誌

Fashion Theory : The Journal of Dress, Body
and Culture. Routledge and Duke.

New Magazine : Nov. 1998, Juillet. Aout. Oct.
1999.

■マダガスカルにおける民族集団の分布

"Atlas de Madagascar" (1969-1971), "Histoire de
Madagascar" (Deschamps, H. 1972). "Ny Nosin-
tsika" (Giambrone, N. 1975)に基づき作成



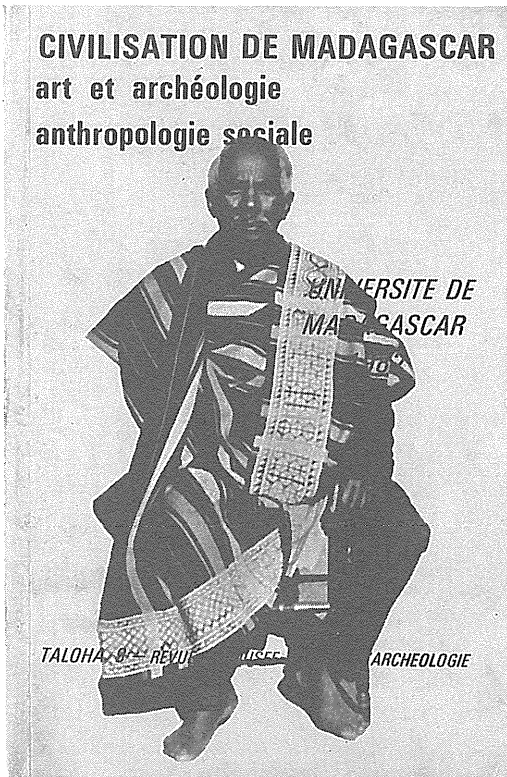
民族集団別の人口

●名 称	●1934年	●1975年
1 アンタンカラナ	221,919	50,000
2 サカラバ	140,788	470,000
3 ツイミヘテイ	390,351	573,000
4 ベツイミサラカ	59,876	1,165,000
5 シハナカ	961,294	187,000
6 メリナ	25,113	2,000,000
7 ベザズサズ	502,432	62,000
8 ベツイレウ	267,193	954,000
9 クナラ	9,558	293,500
10 アンタババアカ	199,629	31,000
11 バラ	272,000	267,000
12 アンタイムル	98,000	272,000
13 アンタイファン	429,450	98,000
14 アンタイサカ	406,000	429,450
15 アンタスシ	189,000	406,000
16 マハファツ	76,758	189,000
17 アンタンドゥルイ	165,224	136,000
	428,000	165,224

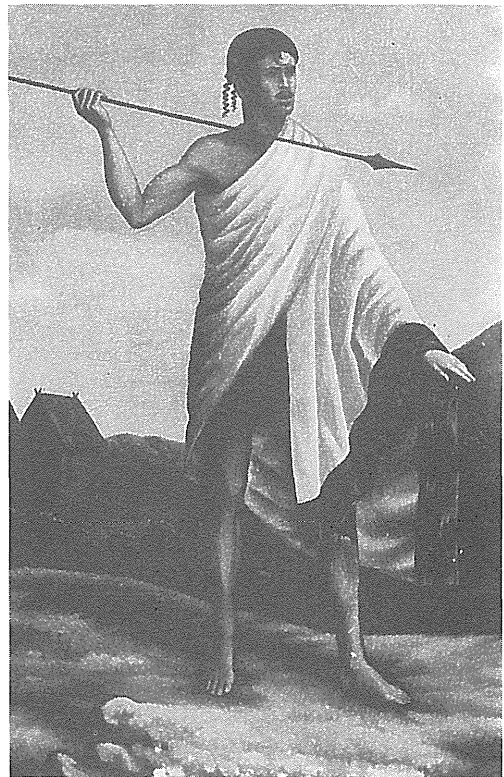
1934年=Ch. Renel "ancetres et dieux"
(1934)による人口

1975年=N. Giambrone "Ny Nosintsika"
(1975)に基づく推定人口

地図1 (深澤 1985: 209)



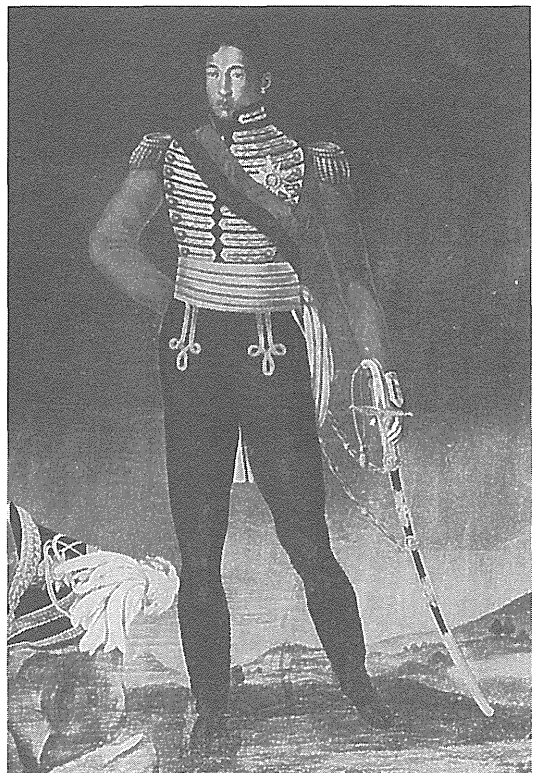
スタイル 1 (Civilisation de Madagascar 1982 表紙)



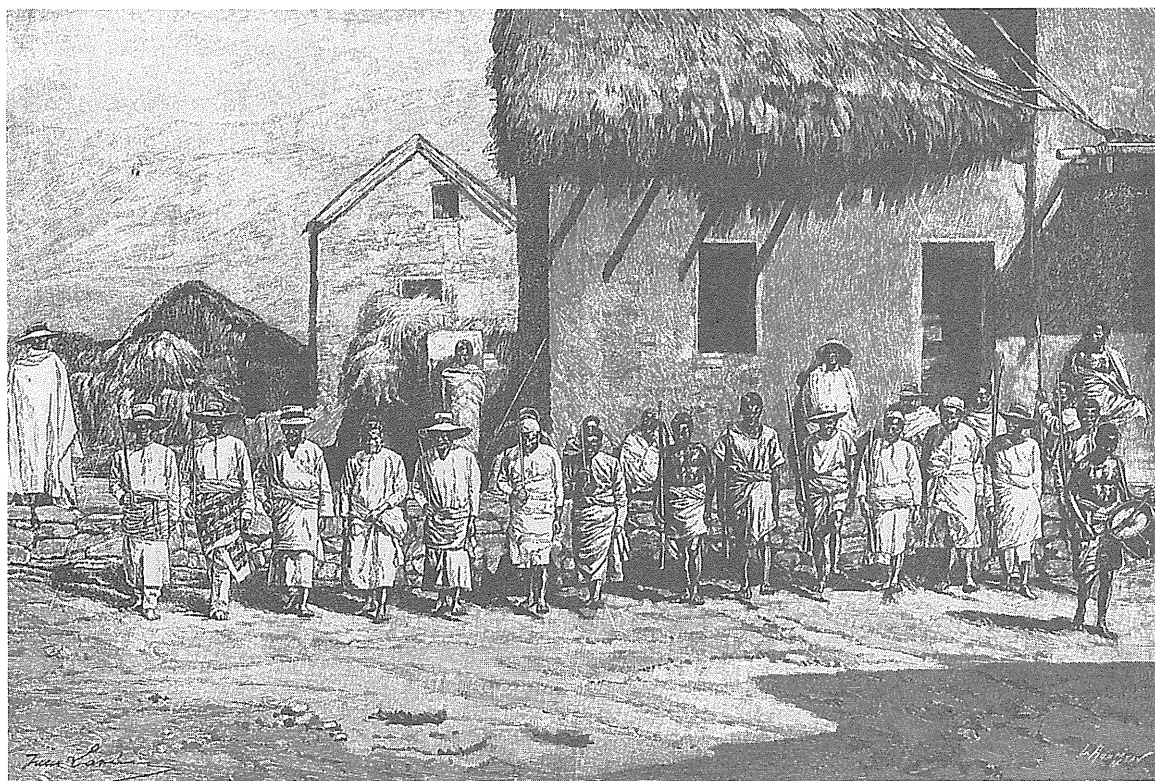
スタイル 2 (Oberlé 1976 : 68)



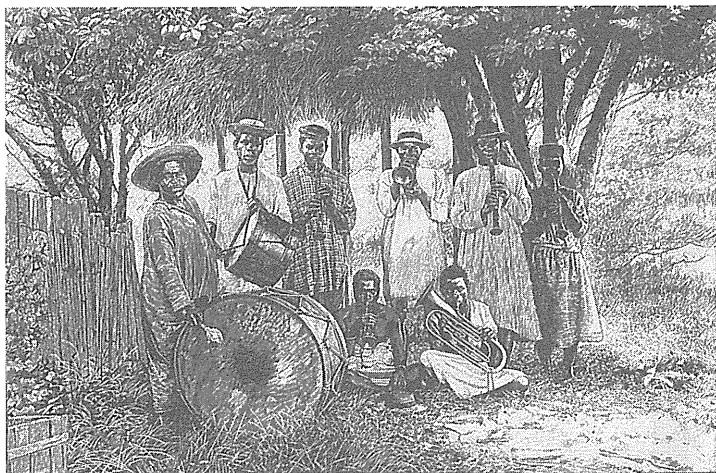
スタイル 3 (Mack 1989 : 47)



スタイル 6 (Mack 1989 : 49)



スタイル 4 (Catat 1893 : 93)



スタイル 5 (Catat 1893 : 255)



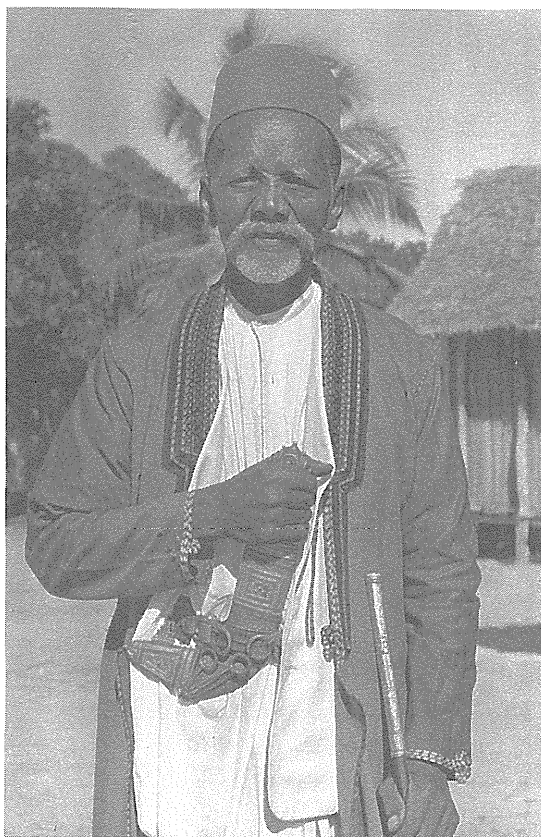
スタイル 7 (Oberlé 1976 : 69)



スタイル 8 (Saron 1956 : 47)



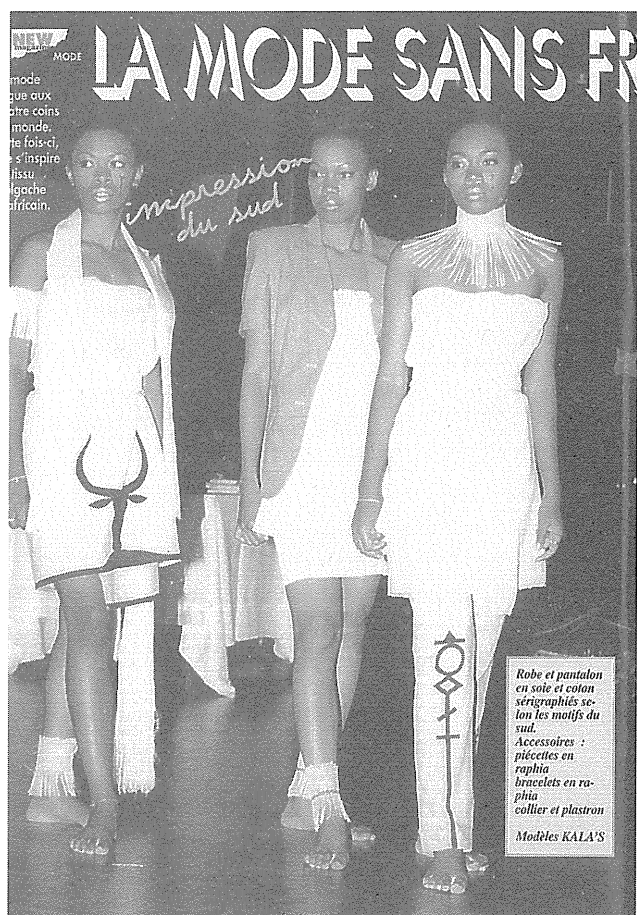
スタイル 9 (Saron 1956 : 63)



スタイル10 (Saron 1956 : 165)



スタイル12 (New Magazine 1999 Aout)



スタイル13 (New Magazine 2000 Juillet)



スタイル11 (New Magazine 1999 Oct)

ABSTRACT

Fashioning Malagasy

Seiko SUGIMOTO

In western eyes a distinction between western dress as “universal” clothing and ethnic or folkloric dress as “exotic” costume is generally assumed. The former is seen as undergoing continual change and is considered a subject of Dress Art History, while the latter is assumed to remain stagnant in style and is treated as a subject of Ethnological or Folkloric studies. However, we could view the historic background of this distinction itself, and reconsider ethnic or folkloric dress from an historical point of view. In this paper I shall consider the process of how fashion in Madagascar has developed in conjunction with western influence over a 200-year period, resulting in the formation of the modern body as Foucault defined.

The transition in clothing styles from traditional wrapping styles fashioned from unsewn fabric called *lamba* to western types of dress in Madagascar began in the eighteenth century during the reign of Radama I of the Kingdom of Imerina in the central highland region. He had his hair cut in a western style and adopted western dress at the same time as he was founding a European-style army and education system; in this way he contributed to the moulding of the modern body to fit in with the nation stage. During the period of French colonial rule, the fashion of wearing *lamba* over western suits prevailed in the capital, and imported cloth was introduced in the production of *lamba*. The image of a traditional Madagascar retaining its ancient culture was maintained at this time in the architecture of the royal palace, which was designed with a view of orientalism by a French artist. The ‘traditional’ woven designs of the *lamba*, sometimes inspired by the motifs of sculptures within the royal palace, were protected, selected and developed by art schools. Since then, the custom of wearing *lamba* over western dress has become the quintessential Madagascar style, especially in the area of the central plateau. We can understand that the westernized modern body was vested with the meaning of ‘Malagasy life’ by the *lamba*.

Fashions provide attractive spectacles through playing with differences, interweaving polyphonic meanings. To put on clothing means nothing less than to fashion a body with an expression of values and thought, which are contained in the style itself. In the 1990’s, some Madagascar fashion designers created what they called ‘original Madagascar mode’, using traditional motifs from sculptures on local tombs in southern Madagascar, and using the natural wild silk and raphia native to Madagascar. This phenomenon highlighted the development of the Madagascar fashion industry, and showed the possibility of reinforcing the opposing impressions of west as “civilization” and Africa as “nature”. At the same time it helped to settle the opposition between the

center, the capital where those designers live, and the periphery, which provides local image sources. However, what is most important is that designing the modern Madagascar mode might result in creating new bodies for Madagascar people with dress styles that transcend the deep-rooted differences among the people of a multi-ethnic nation state.